

ることから簡単に信じられぬ。專信の歿年は傳えるところによると文永二年（一二六五）という、一應これに従へば、もし移住したのであるならば宗祖の歿時弘長二年（一二六二）からの間三年間の事實とせねばならぬ。併し結論的にいへばこのような事實はなかつたのでないか、それは結局願照寺が專信の血統を傳えたと稱することから出たのであつて、願照寺二代性信は、「交名帳」諸本皆專信門をいうけれども、併し眞弟（實子）であつたという證據をあげることは出来ないのである。とにかくここでは「日記」の性格を考え、專信の初期教團に於ける位置を高く評價したいと思うことである。

「論註」における増上縁の語義について

藤谷大圓

「論註」には増上縁の語が三ヶ處ある。(一)は上卷十一左の妙色功德の下にある「安樂淨土は無生忍菩薩淨業所起、阿彌陀如來法王所領、阿彌陀如來爲増上縁」、(二)は下卷末の「覈求其本阿彌陀如來爲増上縁」、(三)は三願的證を終つて「以斯而推他力爲増上縁」、とあるものである。又單に増上の二字だけでは、上卷二十左、下卷十五左、同二十二右に見られ、このうち上卷二十左を除いて他は前の三ヶ處の増上縁と同じく彌陀の本願力を指すと見て大體よいようである。

「論註」の増上縁の語義解釋については、それが他因説に墮らないだけの用意は必要であらう。そこで注目されるのは、

「中論」の觀緣品第一の月稱の註釋中に出てくる四縁の定義である。その中増上縁の定義について「若し此有る時、彼起るならば此は彼の増上縁である。」という佛陀の定義があげられ、他因論を批判する部分において四縁が出されている。月稱は四縁の定義は世俗諦における世尊の言葉であると述べている。従つて、此有る時彼有りという場合の此と彼とは相依相成の關係であることは通例の如くである。

先づ「論註」の妙色功德の下の文について考えてみる。初めの「安樂淨土は無生忍菩薩淨業所起」は淨土莊嚴が實有の見、即ち有無の見を離れた妙境界であることをあらわし、次の「阿彌陀如來法王所領」はその妙境界は彌陀なる受用身の所領、即ち有情成熟なる大悲の具象であることをあらわし、「阿彌陀如來爲増上縁」は彌陀受用身の具象なる故に、従つて彌陀と淨土の關係は相依相成の關係、即ち有情の成熟せしめられる淨土は彌陀なる受用身の所成であり、受用身は淨土建立によつて受用身としての義が、成ぜられるという趣趣をあらわすと解せられる。

次に覈求其本釋では彌陀の本願力と衆生の五念行成就との相依相成である。

そして以上二項のことは次下に「凡是彼淨土及彼菩薩人天所起所行、皆緣阿彌陀如來本願力故、何以言之、若非佛力四十八願便是徒設」として三願的證を行つてのことよりして明らかであらう。

増上縁のこうした語義が最も重要視されると考えられるのは第三の「以斯而推他力、爲増上縁」という増上縁である。衆生

の成佛（五念行成就）は他力に縁つて果遂せられ、他力は衆生の成佛に縁つて成就せられる道理、すなわち「若非佛力四十八願便是徒設」の意であつて「略論」九右の「其實、非度、非不度」の句が注意される。従つて「言他力者如來本願力」となる。

以上の如くである時、覈求其本釋は先輩の説の如く、速得成就阿耨多羅三藐三菩提の速得についての釋であるには違ひないが、直接には衆生の成佛が既に本願の上に約束されているということであるという意趣を強調するのが覈求其本釋の直接の意味ではなからうか。速得の因縁とはそういう意味であらう。そして速得の二字を曇鸞は七地沈空の難なきことの意味に解したと思われる。それは①「論註」の初めに「十住論」を引き「淨土論」は易行道開顯の書であるとしているが、「十住論」における易行道は二乘地に墮する即ち七地沈空の難を怖れたところに開かれた易行道である。（二）下巻二十右以下において淨土には七地沈空の難なき故に上地の菩薩と畢竟して身等しく法等しきを得る。龍樹や天親が淨土を願生したのもこの爲であらうと述べられているからである。云いかえると、七地沈空の難のないことが速得成就ということであり、「何の因縁あつてか」という問に答えるのが、他力増上縁であることとなる。かく見る時「淨土論」を以つて易行道開顯の書であり、上行の極致不退之風航者也とした曇鸞の素意がより説明に理解されると思う。ところで、この巻末の速得成就についての問答に於て、問は「論」の所述について何の因縁あつてか速得なるやと問うたのに對し、答は「論」文をそのままにして「論に五門の行を修し

て以つて自利々他成就するが故にと云えり」として速得の因縁は何も答えられていない。このことは既に論主が能令速満足功德大寶海と速満足を教示せられているからという意趣であらうが、この問答からして曇鸞の論主天親の教説に絕對歸依の心情が伺われ、よき人の仰せに隨うのみであるという心境が汲みとられると思うのである。かくて曇鸞は天親に導かれ、天親は龍樹に、龍樹は釋尊にと直接に導かれるのは佛説の傳統者であつて、上巻末八番問答における下々品の者が善知識に導かれる相である。「覈に其の本を求むれば」の本の字は、かかる意味から考へるとき、速く廣く種々應化の傳統を包攝しているのである。

註 ①「往生論註講要」九六頁、

善導の六字釋について

藤原幸章

善導の六字釋は周知の如く觀經下下品十聲稱佛の上に願行具足必得往生の道理を明らかにしたものである。それ故に善導につながる法然系の人々は齊しくこれに注目したのであつて、宗祖においてもより例外ではなく先學亦これが研鑽に心血を注いだのであつた。然るにこうした先學の領解は當然のことながら先づこの疏文の嚴密な加點邦讀から出發しかくして愈々その本義の顯彰に努めたのであつた。所でこの場合そのきめてとなるべき宗祖自身の讀法が一般には殆んど知られていなかった